

わせて気持ちに寄り添うようにしたりして常に見守っていくことで、園児一人一人の中で保育教諭等への信頼感が芽生えていくようにすることが大切です。園児一人一人が自分のことを保護者など以外にも大切に思ってくれる「担任の先生」との温かい関係があつてこそ「教育及び保育」が成り立つと言えるでしょう。

園児の視点に立ち、一人一人の心の動きを探る

園児一人一人の心の動きを探るには保育教諭等が直接尋ねるのではなく、時には声を掛けずに見守ることや、園児同士の関わりの中から読み取ることも大切です。

以下では、5歳児が異年齢学級のグループ名を何にするかについて話し合っている場面のことです。

どうしても「最強」という言葉を入れたいというB児の主張に対して、他の園児たちから「“最強”ってなんか強くて怖い気もする…」という意見が出た。B児は「だってかっこいいもん！」と意見を曲げようとしない。担任は頑なに曲げないB児の気持ちも受け止めつつ、自分たちで話し合って決めてほしいという思いから、周りの園児からどのような考えが出てくるのか様子を見守ることにした。なかなか話合いがまとまらなかつたが、「皆が分かる言いやすい言葉にしたい」という思いは共通になつた。

また、「年少さんってその言葉分かるのかな？」と担任がそつとつぶやき、B児も含め、皆がどのような反応をするのか探つてみた。すると「年少さんを連れてきて聞いてみよう！」という提案が出て、すぐに年少児を呼びに行つた。そこに来た年少児に皆で「“最強”って言葉分かる？」と訊ねると「…分かんない」という年少児たち。その言葉を聞いた途端、皆がB児の反応に注目した。B児もその言葉を聞きはつとして、「…やっぱ“最強”入れんとこう！」と自ら言葉を入れないという提案をした。B児は、自分だけの強い思いで付けたい名前を押し通すことから、三学年が関わる兄弟学級の名前だからこそ、皆が知つてゐる言葉で名前を付けたいという思いに変わっていった。

この場面で、もし保育教諭等が、話合いが揉めることを避け、早く決めようという思いで園児たちに関わついたら、B児がこのように他者の視点に気付き、自ら納得して意見を変えることは難しかつたかもしれません。B児が思いを尊重してもらつたことが、結果としてB児自身が年少児の思いを尊重する成長につながつてはつたのではなかつてでしょうか。園児たちの目に見える行動や発言のみではなく、行動の背景にある、園児一人一人の気持ちや考えなどに目を向け、その心の動きや何が要因となつて心が動いたのかなどを見落とすことのないよう、丁寧に捉えていくことが大切です。